

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐々木剛二

佐々木剛二氏の論文「ブラジル日本移民の政治、知識、徳：移民知識人をめぐる歴史民族誌」は、ブラジルに移民した日本人が、過去100年ばかりの歴史の中で、独自の歴史的記憶と徳を保持する政治的主体として構築されていく過程を、彼が「移民知識人」と呼ぶ人々の活動に焦点を合わせながら、文化人類学の観点から記述し、分析するものである。本論文は、佐々木氏が主に2006年10月から2007年5月（約7ヶ月）、2007年11月から2008年12月（約13ヶ月）、2009年10月から11月（約1ヶ月）の計3回にわたってブラジルにおいて行ったフィールドワーク、およびその前後に日本において行った文献調査に基づいている。

以下に、本論文の各章ごとの概要について述べる。第1章は、序論として、本論文の主題を提示し、知識と移民に関する先行研究をレビューしつつ、理論的枠組みとアプローチの方法について述べている。第2～6章では、1908年から今日に至るブラジル移民の歴史をいくつかの時代に分け、それぞれの時代の歴史的・政治的条件における移民知識人たちの営みが歴史民族誌的に描かれている。第2章では、1920年代から40年代前半における戦前期のブラジル日本移民の知識層の形成を取り上げ、彼らが当時の日本とブラジルの政治的・社会的条件の中で自らの立場をどのように理論化していったかということについて論じている。第3章では、1940年代後半から60年代後半の移民社会の混乱期から安定期への転換に焦点を当て、ブラジルと日本における政治環境の変化への移民知識人たちの対応を分析しながら、とくに1950年代のサンパウロ四百年祭やブラジル日本移民五十年祭を契機として顕著になった移民の政治的・道徳的主体化や「日系人」の生成について論じている。第4章では、1940年代後半から70年代後半に形成された移民知識人グループの活動が取り上げられる。とくに「土曜会」の活動に着目し、同会のメンバーが中心となりブラジル日本移民五十年祭との絡みで行われた「コロニア実態調査」や、1960年代から70年代にかけて行われた移民の歴史編纂の活動がブラジル日本移民史料館の建設へと繋がったことが検討されている。第5章では、2000年代のサンパウロに焦点を合わせて、日系旅行社と邦字新聞社という二つの異なった「プロジェクト」が分

析される。これを通して今日の日本移民社会に生じている構造的変化——ブラジル主流社会への拡散や日本への出稼ぎ——の実態が明らかにされる。第6章では、2008年に行われたブラジル日本移民百周年祭における移民知識人の実践に焦点を当てながら、ブラジル日本移民の記憶や歴史について検討し、「徳」というテーマがその中心的な位置を占めていった過程を明らかにしている。第7章では、前章までに行ったブラジル日本移民知識人の知識実践の歴史民族誌的な記述に基づいて、移民政治、知識、徳という本論文の中心的テーマに関して理論的考察を加え、最後の第8章では、本論を総括し、本研究の意義を示して結論としている。

以上の構成を持つ本論文の意義は、第1に、ブラジルにおける日本移民の移民知識人に注目することで、移民研究と知識研究の統合を試み、移民知識人の知識実践の集積と特質を明らかにすることによって、人類学における移民・知識研究を刷新したという点である。

第2に、移民知識人の行為を状況化されたプロジェクトの集合として記述し、これを約100年にわたる移民政治の時間的拡がりの中で形成されてきた物語論的条件の変化において理解することで、彼らの知的営みを位置づけ、通時的な歴史民族誌の動態において示したことである。このような試みはこれまで行われてこなかった。

第3に、このような移民知識人の営みが、とりわけ2008年のブラジル移民百周年記念式典において、「勤勉」、「正直」、「誠実」といった「徳」に収斂していったことを指摘し、日本移民が独自の歴史的記憶と徳を保持する政治的主体として構築されたことを明らかにしたことである。

審査においては、本論文における議論の仕方、とくに移民知識人の定義と彼らの知的活動の位置づけ、さらに「徳」や行為主体性（agency）の概念をめぐって批判的なコメントも提出された。しかし、本論文の持つ価値は十二分に高いものがあり、本論文は文化人類学の研究に対して重要で貴重な貢献をなしていると判断された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。